

令和 3 年 6 月 18 日現在

機関番号：32643

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K17334

研究課題名（和文）将来の地域医療を担う薬学生の臨床能力向上を目指した医療面接授業プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of the medical interview program to improve clinical abilities of pharmacy students

研究代表者

長谷川 仁美（HASEGAWA, Hitomi）

帝京大学・薬学部・講師

研究者番号：60775641

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、薬学生が患者中心の医療を意識した臨床能力を身に付けられる教育プログラムを開発することを目的として行なった。実務実習履修前後の薬学生と現役薬剤師を対象とした模擬医療面接に関するワークショップを複数回開催し、模擬医療面接の会話内容について言語分析と非言語分析を行ない、学生と薬剤師の言語的及び非言語的な違いや、医療面接における重要なポイントを抽出することが出来た。これらの結果を加味して医療面接評価のためのルーブリックの観点と基準を作成することが出来た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

厚生労働省から「患者のための薬局ビジョン」が公表されて以来、薬剤師の業務は対物から対人へ移行した。現在、臨床において患者に接しながら薬学的な問題を発見し解決できる実践的な能力を有する薬剤師の養成が必要である。患者の薬物治療に積極的に関わるためには患者との信頼関係の構築と適切な服薬指導を行なえるよう学生を教育することが求められるが、このような臨床能力を鍛える教育をエビデンスに基づいて行っている大学はほとんどない。本研究で得られた成果を学生教育に活かすことで、エビデンスに基づいた質の高い授業を目指し、地域医療に貢献することが出来る。

研究成果の概要（英文）：This study sought to develop an educational program in which pharmacy students can acquire clinical abilities conscious of patient-centered medical care. Workshops on mock medical interviews for pharmacy students before and after receiving clinical training and active pharmacists were held several times. Linguistic and non-verbal analyses of the conversation contents of mock medical interviews were conducted. Based on the results, linguistic and non-verbal differences between students and pharmacists and important points in medical interviews were extracted. Taking these results into consideration, a rubric for medical interview evaluation was created.

研究分野：薬学教育

キーワード：薬学教育 医療面接 薬学生 薬剤師 地域包括ケア

1. 研究開始当初の背景

現在、我が国の超高齢社会化に伴う 2025 年問題に対する対策として地域包括ケアシステムの構築が厚生労働省により推進されている[1]。薬局薬剤師は、地域医療のファーストアクセスとして健康相談を受け、セルフメディケーションを推進する役割が期待されている。同時に、『患者の為に薬局ビジョン』が展開され、健康サポート薬局の充実化が望まれており、かかりつけ薬剤師制度も始まった。薬剤師が患者のかかりつけとして機能する為には、患者ごとの正確な服薬情報の把握と薬学的管理・指導が出来なければならない。また、薬剤師は処方箋や患者の語りから得られる情報を基に適切な臨床判断をすることが求められる。そこで、患者自身から必要な情報を引き出すためには、患者との信頼関係を構築し高度な医療面接ができる力を身に付ける事が必要となる。現場で働く薬剤師を対象とした医療面接の研究は多く、しかしながら、今の現場薬剤師の中で、十分に患者の声に耳を傾けることができている薬剤師は少数ではないかと言われており、薬剤師として社会に出るための本当に必要な臨床能力を鍛える教育をエビデンスに基づいて行っている大学がほとんどない。国民や社会から薬剤師が認められる存在になるには、絶えず変化する社会情勢、薬剤師を取り巻く環境を察知した教育を継続して行っていくことが大事ではないかと考えている。

2. 研究の目的

本研究では、将来地域医療を担う薬学生のための、臨床思考プロセスと医療面接を実践的に学ぶ質の高い授業プログラムを構築することを目的とした。現在地域で活躍している薬剤師に協力して頂き、現役薬剤師がどのような医療面接を行っているのかを詳細に解析する。その詳細な解析結果を基に、薬学生が卒業後に薬剤師として活躍できるような力をつける授業プログラムを構築し、適切な評価を行う方法を構築する。地域医療で活躍している現場薬剤師や実務実習を経験した学生の医療面接について調査を行い、様々な観点からの意見を取り入れることにより、質の高い授業プログラムを構築し、地域医療へ貢献することを目指した。

3. 研究の方法

< 模擬医療面接における会話分析とルーブリック作成 >

現役薬剤師と実務経験のある教員に協力頂き、複数の模擬症例とシナリオを作成し、模擬患者の養成を行なった。研究の期間中は一年に一回程度、医療面接に関するワークショップを実施し、実務実習前の薬学生と、実務実習後の薬学生、(症例作成には関わっていない)現役薬剤師に、薬剤師役として模擬医療面接を行なってもらった。ワークショップは例年、午前中に模擬医療面接を行ない、午後には薬剤師と薬学生が医療面接に関して年度ごとのテーマに沿ってディスカッションを行った。模擬医療面接の様子はビデオで撮影し、録画内容から逐語録を作成した後、The Roter Method of Interaction Process Analysis System (RIAS)を用いて会話分析を行ない、KH Coderによりテキストマイニングを行なった。また、患者の発話に対する薬剤師役の頷きや、患者へ向ける視線の回数などの非言語行動についても解析した。これらの結果から、医療面接の際の重要なポイントを抽出し、医療面接評価のためのルーブリックを作成した。

< 薬剤師と薬学生による医療面接スキルに関するワークショップについて >

本学薬学部 5 年生(実務実習前)と 6 年生(実務実習後)が模擬医療面接を行った後、卒業生が同症例で医療面接を行い、その様子を学生が見学した。その後、薬学生と卒業生を含む 4 名又は

5名で構成される班を複数作り、「より良い医療面接を行うためには」というテーマで話し合いを行なった。また、現役薬剤師、薬学生、患者役の方に対し、本ワークショップに関するアンケートと、本学で行っているコミュニケーション教育の必要性和臨床思考プロセスに関するアンケートを実施した。

4. 研究成果

< 模擬医療面接における会話分析とルーブリック作成 >

RIASの「社会情緒的カテゴリー」には、あいづち、同意や理解、患者への共感など相手との信頼関係を構築するために用いられる発話が含まれ、「業務的カテゴリー」には患者からの聞き取りや情報提供、助言に関する発話が含まれる。発話内容を解析した結果、どの症例においても、学生と比較して薬剤師の発話では「社会情緒的カテゴリー」が多かった。また、テキストマイニングを行なったところ、4年生の発話では服薬に関する説明が多く、一方的な情報提供を行う傾向が見られた。一方、薬剤師は服薬によって生じる体への影響に関して具体的な例を挙げながら説明をしており、患者からの情報収集に重点を置いていることが分かった。また、非言語行動について薬剤師と学生を比較すると、薬剤師は頷きの回数が多く、患者への共感、傾聴の姿勢が見られた。この様に、いくつかの点で学生と薬剤師の言語的及び非言語的な違いが抽出できたので、これらの結果を加味して医療面接評価のためのルーブリックの観点と基準を設定した。現在、作成したルーブリックを用いて複数人でこれまでの模擬医療面接の評価を行っており、ルーブリックの妥当性を評価しているところである。本ルーブリックを学生に示して事前学習を行ない、医療面接の実技試験の評価表として用いることで、エビデンスに基づいたより効果的な教育に繋がり、具体的且つ客観的な評価が可能となると考えている。

< 薬剤師と薬学生による医療面接スキルに関するワークショップについて >

本ワークショップに関して5段階評価でアンケートを行ったところ、「薬剤師の先生方の意見を聞いて勉強になりましたか?」という設問に対する回答の平均点は、4年生(実務実習前の学生)は4.5点、5年生は4.4点であった

(表1)。ワークショップへの満足度については全体的に高い評価がついており、4年生、5年生、現役薬剤師の間であまり差は見られなかった。また、本学で行っているコミュニケーション教育の必要性に関するアンケートの評価では、4年生と5年生の平均点は3.6点と変化が見られなかった。一方、統合演習の際に学んだ臨床思考プロセスが模擬医療面接に活かされたか、薬剤師が医療面接を行う際に臨床思考プロセスは実用的であるか、という2つの質問に関しては、4年生より5年生の方が高い評価をつけていた。

ワークショップの発表会において、より良い医療面接を行なえるようになる

為には、「専門用語を使用せず分かりやすい言葉で伝えること」、「好奇心を持って知識の引き出

表 1

	4年生		5年生		薬剤師	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
午後のワークショップでは、自分の意見を話すことができましたか? [出来なかった1点~良く出来た5点]	4	(0.9)	3.9	(0.8)	4.2	(0.8)
薬剤師の先生方の意見を聞いて勉強になりましたか? [勉強にならなかった1点~とても勉強になった5点]	4.5	(0.5)	4.4	(0.5)	-	(-)
本ワークショップに参加して、医療面接に対する意識は変化しましたか? [変化しなかった1点~とても変化した5点]	4	(0)	3.9	(0.6)	4.2	(0.8)
本ワークショップへの満足度を教えてください。 [不満足1点~満足5点]	4.4	(0.5)	4.6	(0.5)	4.3	(0.5)

表 2

	4年生		5年生	
	平均	SD	平均	SD
本学では1年次からコミュニケーション教育に力を入れています。如何でしょうか? [必要ない1点~とても良い5点]	3.6	(0.7)	3.6	(0.9)
4年次末に「統合演習」を受講されましたが、その際に習った臨床思考プロセスは本プログラムの模擬医療面接に活かすことができましたか? [活かせなかった1点~活かされた5点]	2.5	(0.9)	3.4	(0.7)
臨床思考プロセスは薬剤師が医療面接を行う際に実用的だと思いますか? [実用的ではない1点~実用的である5点]	3.4	(0.7)	4	(0)

しをたくさん作り患者さんの状況や背景をよく考えること」、「患者さんとの信頼関係を築くために話題作りをできるようになること」、「説明するより話を聴く、傾聴の姿勢、心を傾けて患者さんの話を聴くこと」等が大切であり、そのためには大学で「様々なシナリオを体験して臨機応変に対応できるコミュニケーション力を養うプログラム」や「大学教員ではなく現場で働く薬剤師の方とコミュニケーションをとるプログラム」があったら良いのではないかという意見が出された。学生は、自身が医療面接を行なった後に現職の薬剤師の医療面接を見学したこと、さらに薬剤師と意見交換ができたことを通じて、通常の授業では得られないより大きな気づきを得られたのではないかと考えられる。

今後は現役薬剤師に医療面接に関する認識など臨床思考プロセスに関することをインタビューし、抽出できたポイントを授業プログラムに取り入れていく予定である。

[1] 厚生労働省．地域包括ケア：http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/（2021年6月アクセス）

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 岸本 成史、小佐野 博史、奥 直人、渡邊 真知子、安藤 崇仁、厚味 徹一、板垣 文雄、大藏 直樹、岩澤 晴代、長谷川 仁美、長田 洋一	4. 巻 5
2. 論文標題 帝京大学におけるオンライン授業による統合型演習の実践	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 薬学教育	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24489/jjphe.2020-071	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 長谷川仁美、岩澤晴代、長田洋一、奥秋美香、丸山桂司、小佐野博史、岸本成史
2. 発表標題 実務実習における到達目標到達度の自己評価の分析
3. 学会等名 日本薬学会第141年会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 平本貴洋、長谷川仁美、平井めぐみ、中村英里、岩澤晴代、奥秋美香、長田洋一、渡辺茂和、岸本成史
2. 発表標題 医療面接の会話分析に基づいたルーブリックの作成
3. 学会等名 第5回日本薬学教育学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岩澤晴代、厚味徹一、安藤崇仁、板垣文雄、黄倉 崇、長田洋一、岸本成史、北加代子、小佐野博史、佐藤元信、出口芳春、長谷川仁美、横山和明、渡邊真知子、安原真人、奥直人
2. 発表標題 分野横断型統合演習の遠隔実施による教育効果
3. 学会等名 第5回日本薬学教育学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 長谷川仁美、平井めぐみ、中村英里、岩澤晴代、奥秋美香、渡辺茂和、齋藤百枝美、岸本成史
2. 発表標題 薬学生と薬剤師による気管支喘息症例と心不全症例の医療面接における会話内容の比較
3. 学会等名 日本薬学会第140年会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 長谷川仁美、武田佳奈、中村英里、太田晴香、岩澤晴代、奥秋美香、渡辺茂和、岸本成史
2. 発表標題 薬学生と薬剤師による模擬医療面接における会話内容の言語・非言語分析
3. 学会等名 第4回日本薬学教育学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岸本成史、長谷川仁美、渡邊真知子、安藤崇仁、板垣文雄、厚味徹一、小佐野博史、黄倉崇、大藏直樹、岩澤晴代、細山田真、渡辺茂和、栗原順一、奥直人
2. 発表標題 薬物治療の統合型演習における到達目標の自己評価を用いた学習成果の把握
3. 学会等名 第4回日本薬学教育学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩澤晴代、北加代子、厚味徹一、安藤崇仁、大藏直樹、岸本成史、小佐野博史、佐藤元信、長谷川仁美、原田史子、横山和明、渡邊真知子、安原真人、栗原順一、奥直人
2. 発表標題 大規模教室におけるアクティブラーニングによる分野横断型統合演習の実施とその効果
3. 学会等名 第4回日本薬学教育学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長谷川仁美、武田佳奈、中村英里、岩澤晴代、奥秋美香、渡辺茂和、岸本成史
2. 発表標題 模擬医療面接における実務実習履修前後の薬学生と薬剤師の会話内容の比較
3. 学会等名 日本薬学会第139年会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長谷川仁美、武田佳奈、中村英里、林和平、奥秋美香、岩澤晴代、渡辺茂和、岸本成史
2. 発表標題 薬学生及び薬剤師の医療面接スキルアップに関するワークショップの試み 在 student と卒業生のコミュニケーションから見えるもの
3. 学会等名 第3回日本薬学教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大竹隼生、長谷川仁美、高塚人志、奥秋美香、名取雄人、岩澤晴代、楯直子、岸本成史
2. 発表標題 気づきの体験学習がもたらす協同作業認識とディスカッションスキルの認識の変化
3. 学会等名 第3回日本薬学教育学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------